

住宅からもはじめる町づくり。

神山町が、 集合住宅を 建てています。

あたらしい住宅のカタチ
Live Your Community

町の来し方、行く末を考えながら、町が中心となり、多くの人たちが対話を重ね、ゆつくりと建てられていく集合住宅があるという。徳島県・神山町。そこにはどんな住まいのカタチがあるのだろうか。

Photographs by Hiroshi Takaku text by Reiko Hisashima

徳島阿波おどり空港から1時間ほど南西に車を走らせると、川に沿って集落が点在するようになってくる。流れているのは、吉野川の支流・鮎喰川。この流域に広がるのが神山町だ。周囲を囲む1000メートル級の山々には、戦後植林された杉が美しく並んでいる。

神山町では、2005年、四国で初めてほぼ全戸に光ファイバーを整備。それが一助となり、IT系のベンチャー企業のサテライトオフィスが開設、アーティストやクリエイターなどの移住も増え、11年には、町から出て行く人よりも、新しく入ってくる人が上回る現象まで起きた。

その神山町で今、これまでにならぬ住宅づくりがはじまっている。「大整地集合住宅」。ここには、ただ住宅を建てるといっただけでなく、神山町の未来を見据えた「取り組みがたくさん詰まっている」。

多くの人が関わる 集合住宅プロジェクト。

「神山中学には、自宅が遠くて通えない生徒のための寄宿舎『青雲寮』がありました。13年前に閉寮し、そのままになっていました。そこに『若者定住住宅』を建てようというのがそもそもの計画でした」と発端を語るのは神山町役場の北山敬典さん。2015年、神

山町の地方創生戦略「まちを将来世代につなぐプロジェクト」が策定され、その実現に協力する一般社団法人「神山つなぐ公社」(以下、つなぐ公社)が設立。集合住宅プロジェクトは、戦略実現の活動の一つとして再度、練り直されることになった。

では、どんな住宅にするのか? 町が提示したコンセプトは、「子育て世代が対象」「住人だけでなく、町の人にも開かれた場所に」「敷地内だけでなく、周辺の景色、土地の文化も考える」「鮎喰川の復興を目指す」「できるだけ神山町の資源、人材を活用する」など。これらを、どうやって住宅設計や周辺整備に生かすのか。神山町の町役場を筆頭に、「つなぐ公社」、建築設計者、ランドスケープデザイナー、施工者、製材所、高校生、そして町内外の人たちが、決して大きな規模ではないけれど、それぞれの立場でプロジェクトに関わるスタイルが出来上がっていった。どんな人がどんなふうに関わり、どんな思いで参加しているのか、それを知れば、「大整地集合住宅」から広がっていく神山町の未来も見えてくるはずだ。

「大整地集合住宅」は、こんな場所になる。



「大整地集合住宅」の、これまでの歩み。

- 2016年
 - 6月 ● 協働設計者募集の3 days meeting。
 - 7月 ● 神山中学校での「あたらしい集合住宅についての説明会」。
 - 8月 ● お別れ会、さようなら青雲寮開催。
 - 鮎喰川すまい塾「集合住宅の計画と、その文化施設の話」。
 - 9月 ● 町産材認定ガイドライン策定。
 - 城西高校神山分校での田源理夫さんレクチャー。
 - 10月 ● 「神山で暮らす3 days meeting」。
 - 鮎喰川すまい塾「地域のもので住宅地をつくる」。
 - 11月 ● 城西高校神山分校での「学童保育」「すだちっくくらぶ」の「あたらしい集合住宅の共有スペースについての説明会」。
 - 12月 ● 鮎喰川すまい塾「すまいの冬はたく、夏はたく」。
- 2017年
 - 2月 ● 鮎喰川すまい塾「森から生まれる家」。
 - 6月 ● 城西高校神山分校での押し木プロジェクト。
 - 10月 ● 入居者募集。
- 2018年
 - 4月 ● 第1期入居開始(予定)。



鮎喰川の向こうに暮かれたコンクリートが積まれている場所に、「大整地集合住宅」は建設される。



「大基地集合住宅」の模型と設計チームの3人、「バイオフォルム環境デザイン室」の山田美希さん(中央)、建築設計者の吉田洋人(左)と池田さん(右)。

住宅を設計する。

周囲の景観を含め、この場所に適した姿を探る。

16年3月、「大基地集合住宅」の基本計画が出来上がった。設計を進めるのは、「青雲寮」の解体設計をする「アルキノバ」、環境と調和した住まいづくりでは定評のある「バイオフォルム環境デザイン室」の建築チームと、景観と生活環境の再生を考える「プランタゴ」と「ユニットタネ」のランドスケープチームからなる設計チーム。神山町の歴史・文化・風土に向き合っ、実際の場所の自然環境を理解し、それに沿った建物・景観設計を行ってきた。

さらに、一緒に住宅づくりに関わる協働設計者を募るため6月に「3 days meeting」を開催。3名の女性に決まった。「現場で設計監理までできると聞いて、迷わず参加しました」という池田友香子さん。吉田洋人さんは、「町の文化、歴史を感じ、生活しながら建築に最

左/ランドスケープチームを率いる「プランタゴ」の田瀬理夫さん。右/1年にわたり建設予定地の風の強さや向き、気温、湿度、雨量をモニター。データは設計チームに伝えられ、設計に反映されている。



初から最後まで関わることができるのが、とても魅力的でした」と意欲的だ。ランドスケープチームに参加する秋山晴日さんは、「一つの地域にどっぷり浸かってパブリックスペースをつくりたい」と応募。つくるのは住宅だけではない。敷地内をどんな植生にするのか、集合住宅のある地域には何が必要なのか。プロジェクトにより広い

視野が生まれたのは、田瀬さんの影響が大きい。敷地内の植生も「外から買ってきたら簡単ですが、それでは神山のよさが生まれない」と高校生を巻き込み、植栽用の樹木を種から育てている。

さらには、「神山に降った雨はすべて鮎川川に流れ込む。川が町をつくっていたのです」と指摘。「鮎川川を復元させる」と川沿いの遊



歩道の整備、船が通上できるための方策まで呼びかける。川で遊んだ経験のある町の人たちには、この提案はかなり魅力的に響いている。

池田さん、吉田さんは7月から住宅建設現場に入っている。「現地にとっぷりとつかうのが楽しみ。町の人たちと共有した感覚を深めたい」と二人は声を揃える。



住宅のバリエーションを話し合うのは、池田さん(左端)と北山さん(右から3人目)。アソビは高田さん(右端)と馬場さん(左から2人目)が担当。

住宅と人をつなぐ。

町役場が「つなぐ公社」と協働で進める住宅づくり。

この4人、「大基地集合住宅」プロジェクトの要と呼んでいだろう。町役場の北山敬典さん、馬場達郎さん、「つなぐ公社」の赤尾亮香さん、高田友美さんは、2016年から2週間に1回の定例ミーティング、月に1回程度の設計チームとのミーティングなどを重ね、集合住宅プロジェクトをリードしてきた。

そこでクローズアップされたのは、子育て世代が住めそうな家の数が極めて少ないということだった。「例えば、神山出身者が結婚して実家以外に住もうと思っても意外に物件がなく、町外に出てしまうケースも少なくありません」と馬場さん。高田さんは子どもたちに視線を向ける。「町が広いので、近所に同年代の子どもがおらず、家では一人だからゲームをするしかない、とよく聞きます。スクールバスなので、寄り道もできない。そんな子どもたちの

状況を少しでも変えられるのではと思っています」。子育て世代の家族が集まることで、大人にも子どもにも新しい神山での暮らしが開けてくるはずだ。だから入居条件に子育て期間だけ、ということも検討している。「子どもが巣立ったら親の暮らし方も変わるはず。そうした変化を考えられる人に住んでほしいです」と高田さん。すでに4回「鮎川川す

まい寮」を開き、どんなことを考えて、どんな人に来てほしいのか、伝えてきた。町内外から、住宅に関心のある人、神山に移住したい人など毎回40~50人が集まったそうだ。この町出身の赤尾さんは、設計以外の部分でもいろいろな発見があったという。「私自身、町の動きを何も知らなかった。プロジェクトを通して、町の人の顔が見え、ほんや

りしていた町の姿が鮮明になったと感じています」。同じように感じる人は、これからもっと増えていくのではないだろうか。

「多様な人がいて、ほどよく新しいことが生まれる、そんな場所にしていきたい」という馬場さん。こんな町にしたいという思いからはじまる集合住宅建設は、多くの人を巻き込んで動き出している。



左/数代前の時代の風情。建物解体の前には町民が集まり、お別れ会「さようなら青雲寮」が行われた。集合住宅の敷地内に設置される。右/集合住宅に興味のある人が集まった「鮎川川すまい寮」。(写真提供:神山町)



住宅のまわり② 鮎喰川コモン。

子どもたちの新しい居場所に期待。

「町域が広く、子どもだけの移動が難しいので、放課後の子どもたちの居場所が少ないことが、神山町の悩みでもあります」というのは学童保育に携わって長い上地文子さん。だからこそ、集合住宅と一緒に建設される「鮎喰川コモン(仮)」に期待している。

1階は「まちのリビング」、2階は本なども揃えた「まちの読書室」として、大人も子どもも利用できるコモンハウスは、子どもたちの新しい居場所になる、と上地さん。「町に図書館がないので、その役割も果たしつつ、放課後に安心して利用でき

る場所が増えるのは、とてもいいことだと思います。」

さらに、鮎喰川沿いの遊歩道などの整備にも期待しているようだ。「子どもたちは水が大好きでしょう？ 今でも、川まで行って遊ぶこともあります。さらに安全に、川で遊びやすくなれば子どもたちの遊びの幅も広がります。」「鮎喰川コモン」から、町の人たちの関わり、自然との関わりが変わっていくかもしれない。

「鮎喰川コモン」について中学生にやったアンケート、回答の一部(資料提供:神山町)。



住宅のまわり① 植栽。

高校生の力を借りて、集合住宅の植栽を整備。

集合住宅の生垣や緑地には神山の植物を、と考えるランドスケープチームが協力を仰いだのが、地元にある城西高校神山分校の造園土木科の高校生。「いろいろな種類の木があることが大事」と、昨年は、山に入り、アラカシ、ツバキ、クスギ、コナラの4種類の種を採取。学校の温室で育ててきた。今年は田瀬さんたちと一緒に山に入り、鮎喰川流域の在来植物の枝を伐り、挿し木で栽培。根付いたものを苗として育てる。この冬から、よく育ったものを選び、敷地に植えるそうだ。

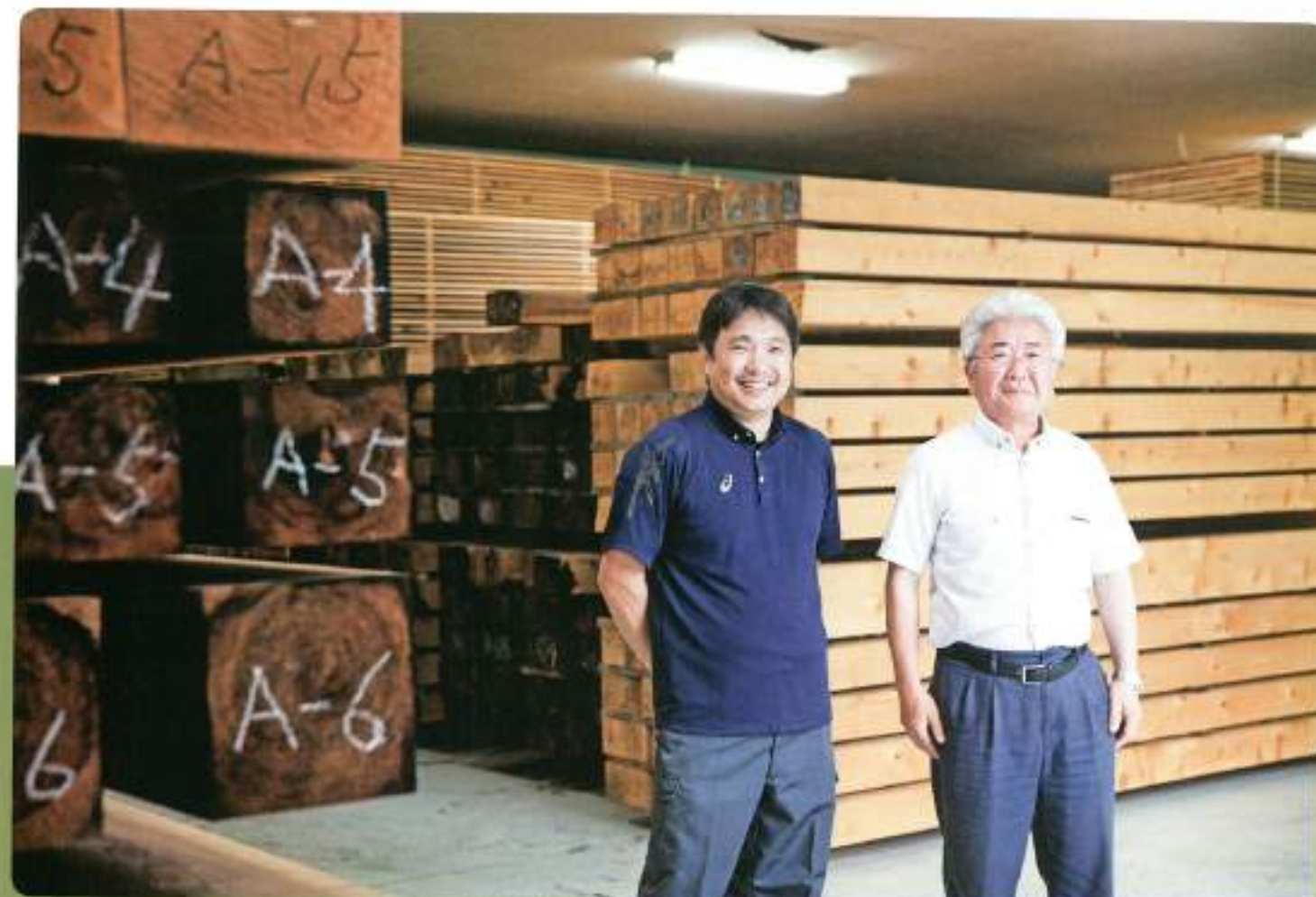
「住宅の植栽に関わることで、神山の自然を知ると

同時に、高校生と町の人たちとの交流が増えることも期待しています」と高校生をサポートしている赤尾さん。

学校と家だけ往復していた高校生が、集合住宅プロジェクトを通して町の中で活動範囲を広げれば、町にも活気が生まれる。集合住宅建設から、町の新しい動きが派生する。それが、このプロジェクトを面白くしている。



昨年拾ってきたどんぐりが、1年でここまで生長した。



製材所の関係者(左)と、林業の活性化に期待する高橋さん。

住宅の素材をつくる。

集合住宅をきっかけに、神山の森を活性化。

この6月末から、神山町では住宅建設の工事が始まっている。工期は3年。1年目の今年は住宅2棟と「鮎喰川コモン(仮)」、地域エネルギー棟(仮)の4棟が建設される。使う木材は100パーセント神山町産。

神山町は面積の86パーセント

が森林で、そのうちの71パーセントがスギやヒノキの人工林。スギは90パーセント以上が伐採時期を迎えているが、なかなか活用は進んでいなかった。「若者定住住宅や空き家改修に、せっかくなら町の木を使いやすい制度をつくりたい、という機運があったところに、今回の集合住宅プロジェクトが立ち上がり、町産材認証制度をつくることに

なりました」と説明してくれたのは、神山町林業活性化協議会の高橋幸次さん。県産材の認証制度を参考に、町という小さな単位だから可能な、伐採した番地までわかるという精度の高い認証制度になった。

今回の住宅では、町内の森林組合が伐採した木材を町内の製材所で柱や板に加工。木材を組

み立てるための「きざみ」という加工は、現場で大工さんが行い、人力のペースで、ゆっくり、ていねいに建てていく。製材所で出る木屑などはペレットに加工されるなどし、住宅の給湯や暖房の燃料に使うことも考えている。製材を行う「小西製材所」の代表・阿部健治さんは町が林業に力を入れてくれることに期待を寄せる。

「町の中で木材が循環するということがうれしい。3年間、木で家を建てる現場を、子どもたちを含めた神山町の人たちが見ることができるようになると思います。これをきっかけに、神山材というブランドを育てていきたい」

すでにある資源を有効に使うという考え方は木材だけではない。安定した地盤を残すために「青雲寮」の基礎部分をそのまま活用したり、壊した建物の構造躯体だったコンクリートは、細かく砕いて地面の下に敷き、水はけをよくする。



左/「鮎喰川コモン」の小屋組みに使われる予定のスギ材。右/「青雲寮」を解体した後のコンクリートから、用途ごとに大きさを選んで活用。

「建設ユニット「BUS」が築90年の古民家を改装した「スガガワオフィス」新築ゲストハウス「WEEK」神山」などは、「3・11以降の建築一環でも、「地域資源を見直す」というセクショで紹介しました。2016年「第15回ブエネチア・ビエンナーレ国際建築展」日本館でも彼らの神山の建築が紹介され、世界的に知られるようになり、背中を押しているのではないかと、町営住宅づくりもそれがいけないといけないという裏返しもあると思います。S、それくらい、ていねいにしないと、地域に魅力を感じにくいのでしょうか。12000年以降、公共建築物では特に住民や利用者との意見交換に取り入れていくワークショップ形式のプロジェクトが多く見られるようになりました。家づくりの場合、関わったことが「与えられた家」(その「家」)と違う気持ちにさせるのかもしれない。宗教建築もそういうところがあります。一緒に作業をして教会や家をつくるのが、儀式のように、一つのシステムになっているのは、共同作業を持つためです。

Sub Sound
五十嵐太郎先生の
ジュウタク
副音声